

# 文章産出の構築展開過程モデルは エッセイの評価を予測するか

藤木 大介

(広島大学大学院人間社会科学研究科)

人間が文章を産出する過程を説明するため、山川・藤木 (2014) 等は構築展開過程モデルを提案した。このモデルでは、伝えようとするメッセージが3つの規則 (展開規則) にしたがって文として産出されるとしている。1つ目は「連想」で、トピックに関わる文の産出に繋がるもの、2つ目は「付加」で、既に産出された文に情報を付け加える文の産出に繋がるもの、3つ目は「具体化」で、既に産出された文に関する具体的な情報を加える文の産出に繋がるものである。また作業記憶との関連から、連想は自動的、付加は制御的な過程とされた。さらに藤木 (2023) は児童期に付加の適用が増加すると報告している。

このように構築展開過程モデルに関する研究は書き手と産出過程の関係を検討してきた。しかし、具体化は規則が適用されることが少なく、書き手の特性との間に関連が見いだされていない。具体化が少ないのは読み手の理解に資するためにメタ的な制御によって産出されるためと考えられるが、具体化の文を伴う文章は読み手に納得を与えるものとなる可能性がある。そこで本研究では、一定程度の作文能力を獲得済みだが作文教育の途上でもあり、その個人差が大きいと考えられる中学生を対象に、制御のレベルの異なる展開規則によって産出された文の数の差が文章としての評価に影響を与えるのか検討し、そこから間接的に書き手の意図を推測する。

## 方法

**参加者** 公立中学校2年生の129名であった。

**材料** 400字詰めB4縦書き原稿用紙1枚で、欄外にテーマが記されていた。

**手続き** 研究協力者がクラス毎に作文のテーマ「先生になりたい大学生にあなたの学校のことを教えてあげてください。」を伝え、鉛筆を用いて原稿用紙1枚を目安に15分で書くよう求めた。

## 結果と考察

白紙で提出された2名を除き分析した。平均文字数は296.4 ( $SD = 99.4$ ) であった。展開規則に従った文の分類は藤木 (2023) と同様の仕方である。大学生2名が行った。両者の分類の一致率は82.6% ( $\kappa = .672$ ) で、分類が一致しなかった文は協議により決定した。作文の質の評価はCarson et al. (1990)の

Table 1 展開規則の適用を受けた文の数と文章の評価との関係

	M(SD)	$\beta$	95%CI	$p$	VIF
連想	4.06(1.76)	.211	[0.04, 0.39]	.019	1.30
付加	2.96(2.02)	.477	[0.31, 0.64]	.000	1.19
具体化	0.27(0.59)	.242	[-0.18, 0.66]	.256	1.18
連想×具体化		-.126	[-0.51, 0.26]	.520	1.33
付加×具体化		-.415	[-0.91, 0.08]	.097	1.34

日本語用のエッセイの採点ガイドラインに基づき行った。これは論旨の明確さや表現の一貫性、語彙の豊かさ等に基づいて6段階で総合評価するものであった。評定者は研究の目的を知らない大学生2名で、それぞれが独立に評定を行った。両者の相関は  $r = .697$  で、2名の評定結果を平均したものを評定値とした。全体の平均は4.04 ( $SD = 1.27$ ) であった。

これらに基づき、評定値を従属変数とする重回帰分析を行った (Table 1,  $R^2_{adj} = .238$ )。独立変数は、連想、付加については文の数、具体化は産出数が少ない ( $N=25$ ) ためダミー変数 (無0, 有1) として、さらに連想や付加に対する具体化の交互作用項を投入した。その結果、連想や付加が多いほど評価が高くなった。これは文章の長さが評価に反映されたものと考えられる。一方、付加と具体化の交互作用が有意傾向だったため、単純傾斜検定を行ったところ、具体化が無かった場合は付加の増減により評価が高低し、具体化が有った場合は付加の数にかかわらず評価が高かった。自身の体験等の具体的な事柄を書いた場合、付加文の数といった文章量によらず評価が高くなると言える。具体化は文章の質を高めることにつながる文を産出する過程といえ、逆は必ずしも真ではないが、読み手の理解に資することを意図したメタ的な制御に基づくものと示唆される。

## 付記

本研究は中森瑞季氏の協力を得て実施した。またJSPS 科研費 (20K03336) の助成を受けた。

## 文献

Carson, J. E., et al. (1990). Reading-writing relationships in first and second language. *TESOL Quarterly*, 24, 245-266.  
藤木 大介 (2023). 小学生の文章産出過程の発達の變化. 日本心理学会第87回大会発表論文集, 637.  
山川 真由・藤木 大介 (2014). 文章産出における心的表象の表出過程のモデル化—表象表出の自動性・制御性— 認知科学, 21, 485-496.